

障害者と共に暮らす人々の価値観に関する研究

—キャンプヒル・コミュニティのボランティアへのインタビューを通じて—

氏名 大西 玖瑠美 (会員番号 010341)

キーワード3つ: インテンショナル・コミュニティ、キャンプヒル、応答責任

1. 研究目的

本研究の目的は、Camphill(以下: キャンプヒル)というインテンショナル・コミュニティにおいてケアを担う①ボランティアの人間関係およびケア責任がいかに形成されるのか、②ボランティアのエートスや価値観はどのようなものか、を明らかにすることである。

健常者中心社会ではなく、(理念としては)障害者中心のコミュニティのキャンプヒルにおいて、障害者の介助を目的としていないにもかかわらず、ケア責任を負い共同生活・共同労働を営むボランティアの価値観はどのようなものか。またどのような責任や価値観が形成されているのか。この問いを明らかにすることで、障害者の自立生活を地域で実現させるために、地域住民に求められる役割や意識などについて考察する一助になるのではないかと考えた。

加えて、「自立」が規範とされる障害者への抑圧的な健常者中心社会から距離を置くキャンプヒルのあり様は、日本の青い芝の会が展開してきた運動—生産性や効率性が重んじられる社会の中で、障害のある自己を肯定し、健常者中心社会そのものを糾弾する運動—の先を行く姿であるように思われる。障害があっても、ありのままに生活が可能な特異なコミュニティにおいて、障害者と健常者がどのような関係性を構築しているのかを明らかにすることは、非常に大きな意義があると考えられる。

2. 研究の視点および方法

本研究では質的研究の参与観察とインタビュー調査を実施し、分析を行った。インタビュー対象者はボランティア15名、障害者4名、地域住民4名の計23名である。研究の視点は、ボランティアの人間関係やケア責任がいかに形成されどのような価値観を持っているのかである。

3. 倫理的配慮

倫理的配慮として、以下の3点を実施した。①調査対象者に調査の目的と意義を説明し、同意を得た上で、インタビュー調査を実施する。インタビューの録音も、対象者の了承を得て行う。なお、インタビューの途中の回答停止や、拒否が可能なことを説明し、万が一、身体的・精神的に負担が生じた場合には、インタビューを直ちに中止する。②調査から得た情報は、個人情報保護に則り、個人が特定されないよう氏名や住所、施設名等を匿名

化し、あるいは略記号に変え、またはその部分を削除する。③調査のデータは、本研究の目的においてのみ使用し、本研究以外の目的では使用しない。調査データの取り扱いには十分に倫理的配慮を行う。本研究は、大阪公立大学現代システム科学研究科研究倫理委員会の承認を得た。なお、本報告に関連し、開示すべき COI 関係にある企業等はない。

4. 研究結果

限定された地域空間からケア責任の事例を取り上げた結果、キャンプヒルのボランティアは、好奇心旺盛な者、コミュニティ生活を好む者が多かった。価値観としては、傾向として人と関わるのが好きな人、農業などの自然が好きな人、お金に執着が少ない人が比較的多かった。また、未知の世界を知ろうとする好奇心や勉強熱心さ、他者との違いを受け入れようとする者が多かった。しかし障害者へのケアを目的に訪れる者は圧倒的に少なかった。このコミュニティで長期に生活するのは、障害者へのケア行為を通じて、彼らを「家族」と観念し居心地の良さを感じているからであることが分かった。

5. 考察

毎日の障害者へのケアを通じて、ボランティアには、レヴィナスが論じるころの応答責任に近い心性が形成され、それゆえに、障害者を慈しみ、人によっては「家族」と観念することでコミュニケーションを深めているのだと考察した。障害者の「顔」に憑依されたボランティアはやむにやまれず障害者をケアし、ケアの過程でボランティアの側は疑似「家族」関係を構築する。一方で、障害者の側は「友達」関係を構築していることが示された。このことから相対的に「脆弱」な側の方が、人間関係を対等であると捉えていると考えられる。これは一見奇妙なことのようであるが、筆者が推察するに、ボランティア側はレヴィナスのいう「顔」に憑依された状態にあるのではないか。彼らがやむにやまれずケアを差し出すことによって大人同士の対称的な関係は崩れ、贈与的なケア関係が出現する。ボランティア側はこの非対称な関係を親密なものとして強く意識しており、それ故にケアを差し出す相手を疑似「家族」としてみなすのではないだろうか。

なお、地域住民は、ケア責任に線引きをし、障害者と友好的な関係を築くものの、ボランティアのように「家族」だと観念するものの方が圧倒的に少なく、これは、ボランティアと地域住民の負う応答責任の差が如実に表れた結果となった。

ここで留意すべきは、「顔」の憑依が一過性のものでなく、ボランティアと障害者のあいだに継続的なケア関係が保たれていたことをどう捉えるかである。これについては、ボランティアがキャンプヒルにおいて衣食住を保障されており、経済的な心配をする必要がなかったこととも関わっていると思われる。本研究から、「顔」の呼びかけと憑依による関係は、それがどんなに慈愛に満ちたものであっても、この社会にあっては経済的安定の裏付けがなければ維持が困難であることが示された。